

大阪商業大学学術情報リポジトリ

教職・副専攻科目「心理学Ⅰ」におけるコロナ禍での遠隔授業形式を用いた講義運営の実践報告

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学教職課程委員会 公開日: 2021-05-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木戸, 盛年, KIDO, Moritoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/990

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



教職・副専攻科目「心理学Ⅰ」におけるコロナ禍での遠隔授業形式を用いた講義運営の実践報告

木 戸 盛 年

はじめに

1. 心理学Ⅰの講義内容について
 - 1-1. 心理学Ⅰの到達目標と成績評価基準
 - 1-2. 心理学Ⅰの授業計画と成績評価方法
2. e-learningシステム（manaba）を活用した講義運営
 - 2-1. manaba上での学習行動の促進
 - 2-2. manaba外での学習行動の促進
3. 取り組みの成果（2020年度と2019年度の比較）
 - 3-1. manaba使用状況の比較
 - 3-2. 成績結果と内容の比較
 - 3-3. 授業評価アンケート結果の比較
4. 総括

はじめに

2020年の初頭より新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染が拡大し、人々は日常生活での様々な活動の自粛が求められている。この感染拡大は高等教育の運営にも大きな影響を与え、日本全国の大学においては4月から講義が開講できない状況が続いていた。この状況の中で大阪商業大学（以下、本学）では4月から開講される予定であった講義の実施が5月11日開始に変更され、講義の実施形態も対面授業ではなく本学のe-learningシステムであるmanabaを活用した遠隔授業によって行われることになった。遠隔授業による講義については、感染拡大が起こる前キャンパスが離れている大学などで実施されることがあったが、現在新型コロナウイルス感染症の感染拡大により遠隔授業による講義を実施しなくては高等教育の運営が不可能な状況である。全国の大学・高等専門学校を対象に行った文部科学省の調査によると、2020年5月20日時点で授業を実施していると回答のあった大学・高等専門学校は864校（回答全体の80.4%）であり、授業を実施している大学・高等専門学校の90.0%が遠隔授業のみによる講義を実施していた。本学でも5月11日よりほぼすべての講義が遠隔授業によって実施されることになり、報告者が2020年度前期に担当していた「心理学Ⅰ」では、本学のe-learningシステムであるmanabaを用いた講義運営を行っていた。

2020年度に報告者が担当している「心理学Ⅰ・Ⅱ」は副専攻科目であり、教育職員免許法

施行規則第5条にて、免許科目「公民」の教科に関する項目で挙げられている科目の1つである。本論文では、報告者が本学の教職・教科に関する科目にて担当している「心理学Ⅰ・Ⅱ」について、2020年度前期のコロナウィルス感染症の感染拡大状況にて遠隔授業を実施した「心理学Ⅰ」の講義の構成と内容を説明する。次に遠隔授業を実施するに際し、講義内容の理解と知識の定着を促進するために報告者が実践した講義運営の方法について紹介する。そして最後にその取り組みの成果について対面授業で行った2019年度の「心理学Ⅰ」との比較を行い、遠隔授業を含めた今後の講義運営について総括を行う。

1. 心理学Ⅰの講義内容について

心理学(psychology)は、人間の心と行動の関連とメカニズムについて探求する学問である。現在日本の初等・中等教育では心理学を体系的に学ぶ機会はなく、学生は大学にて初めて学問としての心理学を学ぶ機会を得る。多くの学生は心理学に関しては初学者であり、心理学を学ぶことで人の心が手に取るようにわかるといったイメージを持っていることが多い。このようなイメージはマスメディアが発信する心理学の一領域に偏った情報や、心理ゲームのような心理学的な要素を含んだ娯楽に触れることによって形成されている。しかし、大学で学ぶ心理学は、実験法や調査法、観察法などの心理科学研究法を用い、客観的なエビデンスを積み重ねることにより発展してきた科学である。このような科学的な心理学について大学の講義にて学ぶことで、学生は科学的な視点から人間の様々な行動や心理を捉えることができ、社会生活の様々な場面に応用し役立てることができるようになる。本学ではこのような科学的な心理学の科目として、2020年度前期に心理学Ⅰを経済学科、経営学科、商学科、公共学科の学生を対象に開講していた。

1-1. 心理学Ⅰの到達目標と成績評価基準

学生は心理学に関しては初学者であるので、心理学が心理科学研究法を用いて客観的なエビデンスを重ねてきた科学であると知ること、そして、心理学が科学であると理解したうえで、科学的な視点から人間の行動を捉え理解できるようになることが重要である。そこで、心理学Ⅰでは「心理学の領域で得られた基礎的な知見・考え方を理解し、自分の言葉で説明できるようになる」ことと、「心理学の領域で得られた基礎的な知見・考え方を自分の生活に応用し、役立てられるようになる」ことを講義の到達目標として設定している。これらの到達目標を達成するため、「この科目で説明された心理学の基礎的な知見を理解し、自分の言葉で説明できるか」、「その知見を自分の日常生活に当てはめ、応用し考察できるか」という知識の理解と応用を心理学Ⅰでは成績評価基準として設けている。次に心理学Ⅰの授業計画の内容と成績評価方法について説明する。

1-2. 心理学Ⅰの授業計画と成績評価方法

心理学Ⅰでは、初学者である学生に対し心理学が科学であることを理解させることから始めることを念頭に置き、遠隔授業の形式で講義を実施するための授業計画を立てた。そのた

め、前半の講義では心理学の目的や様々な領域の心理学についての概説、心理科学研究法についての説明、ギリシャ哲学から心理が科学として成り立つまでの心理学史の説明を行った。そして、後半にかけて科学的な心理学についての知見を深めるため、脳科学、比較心理学・動物心理学、認知心理学、学習心理学、行動分析学、思考心理学、パーソナリティ心理学の領域における学説や実験の説明を行った。このように心理学Ⅰでは、まず前半の講義にて心理学についての誤った理解を矯正し、心理学が科学であることへの理解を深めさせ、後半では学習心理学や行動分析学を中心に人間の行動について客観的に分析する重要性を知ることができるという構成になっていた。

心理学Ⅰの成績評価方法について、各講義は遠隔授業の形式で実施されていたので、講義内容の理解度を測り平常点として加算するため、ディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答、復習・予習レポートの作成の3つの課題を学生に課した。ディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答については、manabaの小テスト機能を使用し実施した。次に、復習・予習レポートの作成についてはmanabaのレポート機能を使用して実施した。定期試験についても同様にmanabaの小テスト機能を用いて実施し、平常点と学期末試験得点の合計得点から単位認定のための総合評価を行った。

2. e-learningシステム（manaba）を活用した講義運営

心理学Ⅰでは遠隔授業の形式で講義が実施されていたが、講義内容の理解と知識の定着を促進するため、報告者は学習心理学や行動分析学の研究で得られた「学習理論」を応用し、心理学的手法を用いた講義運営を行った。「学習理論」とは、人を含む動物の行動が環境に存在する刺激によって生起するというものである。つまり、遠隔授業の形式において心理学への理解と知識の定着を促進するためには、学生が自ら積極的に「manabaにアクセスする行動」、「アップロードされた教材の内容を確認する行動」、「課題に取り組むという行動」を生起させる必要があり、それぞれの学習行動を生起させるための刺激が必要である。また、生じた行動を獲得させ維持させるために役立つのが、行動分析学の「行動随伴性の理論」である。人の行動の獲得と維持には行動をした後の結果が関連しており、学習行動を獲得、維持させるには「学習行動の後に、良い結果（報酬）が与えられること」が必要である。そこで、報告者は心理学Ⅰの遠隔授業においてそれぞれ学習行動を生起させるための刺激を準備し、学習行動の後に、良い結果（報酬）が与えられる環境設定を行った。

2-1. manaba上での学習行動の促進

・manabaシステムにアクセスする行動

報告者は心理学Ⅰの遠隔授業におけるmanaba上での学習行動としてまず「manabaにアクセスする行動」を設定し、この行動を生起させるための刺激を設定した。図1には、manabaのコースコンテンツ機能を用いて講義資料をアップロードした画面が示されている。アクセスの集中を避けるため、各講義の資料は各開講日の午前9:00より表示されるように設定していた。また、前期の期間が終わるまですべての講義の資料がダウンロードし閲覧す

ることができるように設定していた。また、図2には小テスト機能を用いて設定したディスカッションタイムと小テストの画面が示されており、図3にはレポート機能を用いて設定したレポート課題の提出画面が示されている。ディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答、復習・予習レポートの提出についてもアクセスの集中を避けるため、各講義の終了時から1週間の提出期間を設けていた。



図1 manaba のコースコンテンツ画面



図2 manaba のディスカッションタイムと小テストの画面

個別授業 心理学Ⅰ心理学（前期 月曜日） 第4回レポート	
課題に関する説明	<p>心理学Ⅰ心理学を選択している皆様</p> <p>8/1（月）の講義の配布資料の最後に示しました予習・復習レポートテーマについてレポートを作成し提出してください。提出期限は8/8（月）の23:55までとします。</p> <p>また、レポート作成の際には【復習】【予習】の小見出しをつけ、本文中は改行はせずに文章を書いてください。</p> <p>何文字書けばよいという基準はありませんが、予習復習合わせて400字以上（上題はありません）は書くようにしましょう。</p> <p>他人のレポートのコピペやネットにある文章の無断使用は不正行為とみなし、平常点を0としますので注意してください。</p> <p>特に他人のレポートをコピペした場合は、コピペした人もコピペされた人も0点になります（もし、友達から「どんなレポート書いたん？ラインしてよ」などのメッセージが送られてきたら、既読スルーするのが自分の単位を守る一番の方法です）。</p> <p>講義の資料やネットの記事を引用（コピペ）する場合は、レポート本文中の引用した部分に「」をつけわかるようにしましょう。そして、予習レポートの文末や復習レポートの文末に【講義資料及びwikipediaより引用】や【引用文献】「ワークショップ大学生生活の心理学」など引用元の情報を記載しておけば大丈夫です。</p>
受付開始日時	2020-08-01 14:30
受付終了日時	2020-08-08 23:55
ポートフォリオ / 閲覧設定	ポートフォリオに追加 / 提出者本人と教員のみ閲覧・コメント可（個別指導）
学生による再提出の許可	再提出を許可する
添付ファイル	
状態	受付終了 ※遅延として取り扱われますが、まだ提出は可能です。

0文字 0 words

プレビュー（次へ）

図3 manabaのレポート課題の画面

図1に示されている全講義の資料は、一度に全てアップロードされるのではなく各開講日に講義資料がそれぞれアップロードされるよう設定していたので、学生は定期的にmanabaにアクセスするという学習行動を生起させなければならなかった。また、各講義の内容について講義後にディスカッションタイムへの意見入力、小テストへの解答、レポート課題の作成を毎回行くと平常点が加算されるという報酬が得られるよう学習環境を設定していたので、これらの課題に関しても学生は定期的にmanabaにアクセスするという学習行動を生起させなければならなかった。このように学習環境が設定されたことにより、manaba上での学習行動を促進するため重要になる「manabaシステムにアクセスする行動」が生起し獲得され維持されることにつながると考えた。

・アップロードされた教材の内容を確認するという行動

図4にはmanabaのコースコンテンツ機能を用いてアップロードされた講義資料の一部が示されている。各講義資料はMicrosoft PowerPointを使用して作成した。講義資料の上部には重要箇所が空欄にされたスライドが示されており、そのスライドの内容に関する解説の説明文が講義資料の下部に記載されていた。図4に示されているように各講義資料のスライドの重要箇所は空欄になっているので、学生は講義資料をダウンロードできれば良いわけではなく講義資料の下部に記載されていた説明文を自ら読む行動、空欄箇所該当するキー

ワードを説明文の中から抽出する行動、空欄箇所キーワードを自らの手で記入する行動の3つの学習行動を生起させ講義資料を完成させなければならなかった。そして、これらの学習行動により講義資料が完成しその内容を参照することで、ディスカッションタイムへの意見入力、小テストへの解答、レポート課題の作成が容易になり、平常点という報酬を獲得しやすくなるのである。このように学習環境を設定することで、「アップロードされた教材の内容を確認する行動」が生起し獲得され維持されると考えた。また、各講義が実施された1週間後に空欄箇所に入るキーワードのみ印字した講義資料をアップロードし、自ら記入したキーワードが間違っていないか確認できるようにしていた。

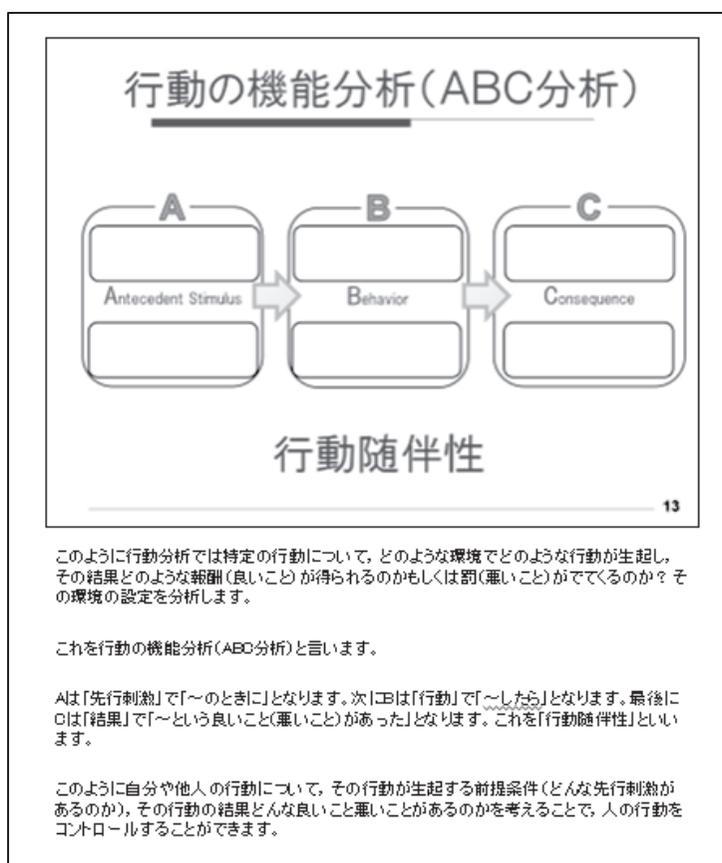


図4 講義資料の例

2-2. manaba外での学習行動の促進

・ 課題に取り組むという行動

報告者は、心理学Iのmanabaシステム外における学習行動として「課題に取り組むという行動」を設定し、この行動を生起させる刺激としてディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答(図2参照)、復習・予習レポートの作成(図3参照)の2つの課題を学生に課した。

ディスカッションタイムへの意見入力と小テストについて、この課題への解答は講義時間

終了後にmanaba上にて入力が可能になるように設定されていた。コースコンテンツにアップロードされた講義資料を確認せず完成させずに小テストに解答した場合、問題の正答がわからず点数が低くなるよう問題の内容を設定していた。したがって小テストの点数が明らかに低く、入力された小テストの解答内容から講義資料の内容を確認・理解せずに解答していたとみなされた場合は、各講義の平常点から減点を行った。

次に復習・予習レポートの作成と提出も講義時間終了後にmanaba上にて可能になり、復習レポートは各講義の講義資料の内容を確認することで作成が可能であった。しかし、予習レポートは次回受講する講義内容に関するキーワードについて説明する内容となっていたので、インターネットなどを活用し自分の手で調べるといった学習行動を生起させる必要があった。

このように、ディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答、復習・予習レポートの作成という2つの課題を設定し、それぞれの課題に関して平常点を与えフィードバックを行うことで「課題に取り組むという行動」が生起し獲得され維持され、manabaシステム外での学習行動の促進がなされると考えた。

3. 取り組みの成果（2020年度と2019年度の比較）

報告者は、心理学Ⅰの到達目標を「心理学の領域で得られた基礎的な知見・考え方を理解し、自分の言葉で説明できるようになる」とこと、「心理学の領域で得られた基礎的な知見・考え方を自分の生活に応用し、役立てられるようになる」とことの2つに設定していた。そして、到達目標の達成のため「この科目で説明された心理学の基礎的な知見を理解し、自分の言葉で説明できるか」、「その知見を自分の日常生活に当てはめ、応用し考察できるか」という知識の理解と応用を成績評価基準として設けていた。これらの到達目標の達成をするため、報告者は「学習理論」と「行動随伴性の理論」を講義運営に応用し、manaba上での学習行動の促進とmanaba外での学習行動の促進に努めた。そこで、本学のe-learningシステムであるmanabaを活用しコロナ禍での遠隔授業を実施した2020年度心理学Ⅰについて、対面授業で行った2019年度の心理学Ⅰとの比較を行いその取り組みの成果を検討する。

3-1. manaba使用状況の比較

表1には、2020年度と2019年度それぞれのmanabaへのアクセス平均回数と範囲、復習・予習レポート課題提出の平均回数が示されている。manabaへのアクセス平均回数を比較してみると、2020年度のアクセス回数は2019年度のアクセス回数のおよそ5倍になっている。2019年度の心理学Ⅰでは対面授業を行い、授業時間中に配布した資料のアップロードと復習・予習レポートの提出にmanabaを利用していた。2020年度は遠隔授業という形式で講義を実施するにあたり、学生は2019年度のmanaba利用方法に加え配布資料のダウンロードとディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答をmanaba上にて行わなければならなかった。このようなmanaba利用方法の違いにより、2019年度と2020年度のアクセス回数の違いが表れたと考えられる。また、復習・予習レポート課題提出の平均回数に関しては2020

表1 各年度のmanaba使用状況

年度	manabaアクセス 平均回数と範囲	レポート提出 平均回数
2020年度	775.8回 (0-2795)	12.1 (全14回)
2019年度	156.2回 (0-1088)	11.2 (全15回)

年度の数値が高くなっているが、授業期間の違いから復習予習レポート課題が出された回数は2020年度が全14回、2019年度が全15回であった。したがって、提出する割合で結果を比較してみると2020年度の方がレポートを提出する傾向がさらに高いことが伺える。

遠隔授業という実施形態からこのような結果になったことが伺えるが、2020年度のレポート課題の提出の割合が高かったことから、今回の学習環境の設定によってmanabaの使用頻度が高まり、授業外での学習行動の促進がされる可能性が示されたと言える。

3-2. 成績結果と内容の比較

表2には2020年度前期開講科目であった心理学Iの成績結果として、各総合評価における人数と割合、ディスカッションタイムと小テストの提出回数、レポート提出回数と学期末テストの平均得点が示されている。2020年度の心理学Iでは、全12回のディスカッションタイムと小テストの提出と内容評価、全14回の復習予習レポートの提出と内容評価をもとに平常点(合計60点)を換算した。そして、記号問題40問(各1点)からなる学期末試験(40点満点)を実施し、平常点と学期末試験得点の合計得点から総合評価を行った。受講生の合計人数は474名であった。この中には旧カリキュラムで通年科目になっている学生も含まれているが、前期の平常点と学期末試験の結果から同様に総合評価を行っている。

表2を見てみると、単位認定された学生の割合は全体の87.1%であり、A+とAの学生は全体の80.1%であったことから、報告者が行った講義運営は満足できる成果があったといえよう。次にディスカッションタイムと小テスト、復習・予習レポートの提出率の結果を見てみると、提出率の高さは総合評価の良さと関連している傾向があり、遠隔授業という実施形態でも今回のような学習環境を設定することで、授業外での学習行動を促進できることが示されたと言える。また、評価DとEの学生の提出率の結果について比較してみると、評価がEの学生の方が高いという結果が得られた。これは普段真面目に課題に取り組んでいたがmanaba上での学年末定期試験が未受験になってしまうという学生がいたため得られた結果であった。この結果から、今後はmanabaの操作方法の周知や試験や講義の情報共有をより徹底する必要性が伺えた。

表3には2019年度前期に対面授業で開講された心理学Iの成績結果として、各総合評価における人数と割合、出席率、レポート提出回数、学期末テストの平均点が示されている。2019年度の心理学Iでは、全15回の復習・予習レポートの提出と内容評価をもとに平常点(合計60点)を換算し、記号問題40問(各1点)からなる学期末試験(40点満点)の得点との合計から総合評価を行った。2019年度と2020年度との成績評価の基準の違いは、平常得点の換算にディスカッションタイムと小テストの提出と内容評価が加えられているかないかであった。講義実施と試験実施の形態、成績評価の基準が異なるので単純に比較することは

表2 2020年度 履修生の成績結果と内容

総合評価	人数	ディスカッションタイム		学期末テスト 平均点
		小テスト提出 平均回数 (全12回)	レポート提出 平均回数 (全14回)	
A+	318 (67.1%)	11.9 (99.2%)	13.9 (99.3%)	37.7
A	62 (13.1%)	10.5 (87.5%)	12.1 (86.4%)	34.6
B	17 (3.6%)	9.5 (79.2%)	10.4 (74.3%)	30.7
C	16 (3.4%)	8.0 (66.7%)	7.2 (51.4%)	31.0
D	16 (3.4%)	4.7 (39.2%)	3.6 (25.7%)	24.3
E	45 (9.5%)	4.9 (40.8%)	4.6 (32.9%)	—

表3 2019年度 履修生の成績結果と内容

総合評価	人数	出席率	レポート提出	学期末テスト 平均点
			平均回数 (全15回)	
A+	134 (32.4%)	93.6%	14.8 (98.7%)	35.2
A	61 (14.7%)	84.3%	13.9 (92.7%)	31.5
B	58 (14.0%)	79.3%	12.8 (85.3%)	29.3
C	57 (13.8%)	72.1%	10.8 (72.0%)	26.8
D	60 (14.5%)	59.3%	6.2 (41.3%)	22.2
E	44 (10.6%)	19.3%	1.2 (8.0%)	—

きないが、評価がA+の学生の割合が2020年度の方が高いという結果が得られた。この原因として、2020年度の定期テストはmanaba上での実施で、受験する際に資料の持ち込みが可能な状態であったことがあげられる。今後遠隔授業をする際には、定期テストの難易度の設定もしくは実施形態に関して再考する必要がある。

3-3. 授業評価アンケート結果の比較

表4には、2020年度心理学Ⅰについての授業評価アンケートの結果が示されており、表5には2019年度心理学Ⅰについての授業評価アンケート結果が示されている。「関心を持てる授業内容である(4.1)」と「教員の授業内容の説明はわかりやすい(4.1)」の評価項目が高かったことから、報告者が実施した講義運営方法により遠隔授業でも心理学を学ぶ動機づけを高められること、授業内容の説明が伝わることを示された。しかし、表5に示されている2019年度の授業評価アンケートの結果とそれぞれ比較すると、どちらも0.1ポイント低くなっていることがわかる。この結果から学びへの動機づけをより高めるために、そして授業内容をより伝わりやすくするためには対面授業での実施が望まれよう。また、「この授業を受けて、いろいろな視点から物事を見ることができるようになった(3.9)」の評価項目が高かったことから、心理学の知識を自分の日常生活に当てはめ応用・考察できていることが示された。しかし、こちらも2019年度の結果と比較し0.1ポイント低くなっていることから、対面授業での実施が講義の目標により到達しやすくするためには望まれよう。

次に「授業内容が理解できている (3.9)」の評価項目の結果が高く2019年度と比較しても0.1ポイント高くなっていたことから、報告者が実施した講義運営方法によって対面授業よりも授業内容の理解が促進されることが示された。遠隔授業を実施するにあたり、報告者はディスカッションタイムへの意見入力と小テストへの解答、復習・予習レポートの作成という2つの課題を設定していた。このように課題に毎回取り組まなければならないという学習環境の設定が、学生自らの学習行動の促進につながり授業内容のさらなる理解につながったのだと考える。

表4 2020年度 授業評価アンケート結果 (2020年7月20日実施)

関心が持てる授業内容である。	4.1	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 10 90 304 310	1 5 30 76 62	1 2 3 4 5	0.6 % 2.9 % 17.2 % 43.7 % 35.6 %
教員の授業内容の説明はわかりやすい。	4.1	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 10 96 300 310	0 5 32 75 62	1 2 3 4 5	0 % 2.9 % 18.4 % 43.1 % 35.6 %
テキスト・解題資料等が内容の理解に役立っている。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 4 75 300 355	1 2 25 75 71	1 2 3 4 5	0.6 % 1.1 % 14.4 % 43.1 % 40.8 %
成績の評価方法が分かりやすく示されている。	3.9	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 14 138 292 235	1 7 46 73 47	1 2 3 4 5	0.6 % 4.0 % 26.4 % 42.0 % 27.0 %
この授業を受けて、自分が何を学ぶべきか明確になった。	3.7	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 22 168 288 170	1 11 56 72 34	1 2 3 4 5	0.6 % 6.3 % 32.2 % 41.4 % 19.5 %
この授業を受けて、いろいろな視点から物事を見ることができるようになった。	3.9	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 12 135 284 255	1 6 45 71 51	1 2 3 4 5	0.6 % 3.4 % 25.9 % 40.8 % 29.3 %
教員は計画的に授業をしている。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 2 93 284 355	0 1 31 71 71	1 2 3 4 5	0 % 0.6 % 17.8 % 40.8 % 40.8 %
授業の内容が理解できている。	3.9	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 18 102 368 190	1 9 34 92 38	1 2 3 4 5	0.6 % 5.2 % 19.5 % 52.9 % 21.8 %
総合的にみて、この授業に満足している。	4.1	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	2 12 87 308 300	2 6 29 77 60	1 2 3 4 5	1.1 % 3.4 % 16.7 % 44.3 % 34.5 %

表5 2019年度 授業評価アンケート結果（2019年7月18日実施）

関心が持てる授業内容である。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 8 138 492 565	0 4 46 123 113	1 2 3 4 5	0% 1.4% 16.1% 43.0% 39.5%
教員の授業内容の説明はわかりやすい。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 10 120 504 575	0 5 40 126 115	1 2 3 4 5	0% 1.7% 14.0% 44.1% 40.2%
テキスト・板書・資料等が内容の理解に役立っている。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 12 117 556 505	1 6 39 139 101	1 2 3 4 5	0.3% 2.1% 13.6% 48.6% 35.3%
成績の評価方法が分かりやすく示されている。	4.1	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 20 159 520 465	0 10 53 130 93	1 2 3 4 5	0% 3.5% 18.5% 45.5% 32.5%
この授業を受けて、自分が何を学ぶべきか明確になった。	3.7	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 32 264 540 230	1 16 88 135 46	1 2 3 4 5	0.3% 5.6% 30.8% 47.2% 16.1%
この授業を受けて、いろいろな視点から物事を見ることができるようになった。	4.0	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	1 20 204 512 395	1 10 68 128 79	1 2 3 4 5	0.3% 3.5% 23.8% 44.8% 27.6%
計画的に授業をしている。	4.1	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 18 150 548 450	0 9 50 137 90	1 2 3 4 5	0% 3.1% 17.5% 47.9% 31.5%
授業の内容が理解できている。	3.8	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	2 20 219 620 230	2 10 73 155 46	1 2 3 4 5	0.7% 3.5% 25.5% 54.2% 16.1%
総合的にみて、この授業に満足している。	4.2	全くそう思わない あまりそう思わない どちらともいえない ある程度そう思う 強くそう思う	0 10 147 476 565	0 5 49 119 113	1 2 3 4 5	0% 1.7% 17.1% 41.6% 39.5%

4. 総括

報告者は遠隔授業においても、学生の心理学の理解と知識の定着を促進し、学生が心理学の知識を自分の日常生活に当てはめ応用し考察できるようになれるよう、学習心理学や行動分析学の研究で得られた理論を応用し講義運営を行った。報告者が実施した講義運営方法については、客観的な使用状況の結果や成績結果からも学生の主観報告である授業評価アンケートの結果からも満足のいく学習効果を示すことができた。

現在、本学では2020年度後期の講義が始まり、コロナウイルス感染拡大に配慮しながらの対面授業が進められている。しかし、今後の感染拡大の状況によって再度遠隔授業による講義運営が始まる可能性は無くならないであろう。そのような状況の中で、遠隔授業による講義運営においても対面授業と同じ学習効果を得られるようにすることはとても重要である。本論文の結果から報告者が実施した講義運営の方法を採用することにより、遠隔授業でも対面授業と同様の高い学習効果が得られることが示されたが、学ぶ動機づけや授業内容の説明・応用に関しては対面授業を実施する方が良いことがわかった。しかし、授業内容の理解に関

しては報告者が実施した講義運営の方法を採用することにより、遠隔授業を実施する方が良いことが示された。これらのことから対面授業と遠隔授業のどちらの方が優れているという視点ではなく、今後のコロナウイルス拡大の状況によって実施された授業形態について、それぞれの授業形態の強みを認識し運営を行っていくことが望まれよう。

参考文献

- 長谷川寿一・東條正城・大島高尚・丹野義彦・廣中直行 (2020). 初めて出会う心理学 (第3版). 有斐閣アルマ, 3-29.
- 今田寛 (2014). 現代心理学シリーズ3 学習の心理学. 培風館, 27-46.
- 岩崎智史・大橋恵・皆川順 (2012). 心理学に対するイメージ (1) -心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした縦断的研究-. 東京未来大学研究紀要, 5, 1-9.
- 文部科学省 (2020). 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について (令和2年5月20日時点). Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (2020年11月30日閲覧).
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・R.W.マロット・M.E.マロット (1998). 行動分析学入門, 産業図書, 15-69.
- 高島直子・中村延江 (2002). 美容専門学校生の心理学観 (Ⅱ):1998年 (五十嵐他, 1999) との比較. 山野研究紀要, 10, 59-66.